

女子大学生における親への親密感と親からの自立との関連 — 適応、発達課題、親の養育態度との関係 —

本道 翔子¹ 新井 邦二郎²

本研究の目的は、親への親密感を「信頼感のある情緒的なつながり」と定義し、「親への親密感」と「親からの自立」との関連を検討すること、そして親密感や自立が、親の養育態度や適応、発達課題と、どう関連するかを検討することであった。そのため親密感と自立、及びそれらを促すような親の養育態度を測定する質問紙を作成した上で、大学生に対し質問紙調査を行い、その内の女子大学生290名のデータを使用し分析を行った。因子分析の結果、親密感質問紙は1因子、自立質問紙は3因子、養育態度質問紙は2因子の構造となり、全ての質問紙に十分な信頼性が得られた。親密感と自立の相関分析の結果では、有意な負の相関がみられ、中でも行動的自立との間に最も強い負の相関がみられた。発達心理学の観点から親密感と自立は正の相関関係がみられると予想されたが、現代の女子大学生においては親密感が自立につながっていないことが明らかになった。また、親密感高群・低群と自立高群・低群の組み合わせの4群における適応や発達課題の指標についての分散分析の結果では、自立度の高低よりも、親密感の高低が適応度や発達課題の達成度に差をもたらしていた。さらに、親密感と自立を独立変数とし、適応や発達課題の指標を従属変数とする重回帰分析の結果では、親密感は適応や発達課題にプラスの影響を及ぼしており、自立はそれらに影響していないばかりか、行動的自立は僅かにマイナスに影響していた。他方、親の養育態度を独立変数とし、親密感と自立を従属変数とする重回帰分析の結果では、愛着形成的養育態度が親密感に大きく影響していた。将来における親から自立の必要性はともあれ、女子大学生という身分においては、従来重要な発達課題とされていた親からの自立よりも親密感のほうが健全な成長に貢献していることが明らかとなった。

キーワード：親への親密感、親からの自立、適応、発達課題、親の養育態度

問題と目的

青年期の自立の時期は、近年、特に先進国において遅延していると言われ、ポスト青年期（宮本、2004）といった独立した発達段階が、青年期と成人期の間に提唱されている程である。日本においても、社会経済状況の変化により、従来のように、高校や大学卒業後に就職し親元を離れ自活を始め、その後結婚し親になる等のライフコースは必ずしも一般的ではなくなりつつある。そして、このようなライフコースの多様化・個人化により、親子関係も変化してきており、1990年代後半頃から、「友だち親子」（季刊子ども学、1997）、「一卵性母娘」（さらだ、1998）といった親子関係の対等性や距離の近さを示す表現が見られるようになった。「友だち親子」の定義は明確ではないが、関連書籍（季刊子ども学、1997）からは、従来の「権威的な親子関係」から「友だちのような対等で親しみやすい親子関係」への変化という意味合いが読み取れる。しかし、その

関係性については、親が親の役割を果たしていない（山登、2013）、本音をぶつけ合わず円滑な関係を保とうとする親子（土井、2014）といった批判も多い。「一卵性母娘」も「友だち親子」と似た意味をもっており、買い物や旅行等の行動を共にしたり、コミュニケーションを密に取っている等、行動的にも心理的にも距離の近い母娘を指し、その関係は一見楽しそうであり相互依存的でもある（水本・山根、2010）と言われる。他方、「親の威厳が強かった頃に比べ、対等で自由な関係の中でお互いを正当に評価し合うことが子どもの成長にプラスになっている」（高阪、2005）といった肯定的な見方もある。そのような友だち親子の肯定的な側面を明らかにした研究として、滝井（2006）のインタビュー調査がある。

滝井（2006）は、友だち親子を「親が権威的ではなく、子どもと対等な立場で接している親子」と定義し、子（21～23歳女性）へのインタビュー調査によってその母娘関係を明らかにしている。その結果、母親に話す内容は多岐にわたり話す頻度も多いこと、自分のことをよくわかってきていると感じていたり、友だちよりも遠慮なく悪い所を指摘してくれると感じ

1 東京成徳大学大学院

2 東京成徳大学

るため、母親に悩み事を話す人も多いこと、母親を人生の先輩や同じ女性として尊敬している人が多いこと等から、母親に対して強い信頼感をもっていることが明らかとなった。

このように、経済的・心理的に依存した関係を強めている一方で、対等性による相互理解を高めていると言われる現代の親子関係は、青年期の自立のあり方にも影響を与えていると考えられる。

従来の青年期の自立に関する代表的な理論としては、Hollingsworth(1928) やBlos(1967) がある。Hollingsworth(1928) は、青年の心理的自立を「心理的離乳」と呼び、12歳から20歳までの全ての青年に「家族の監督から離れ、一人の独立した人間になる」とする衝動が現れると説いた。また、Blos(1967) は、青年期の親からの分離過程を、Mahler, Bergman&Pine(1975) の「分離-個体化の過程」と対比させ、「第2の個体化の過程」と呼び、青年は内在化された愛着対象である親からの脱理想化と情緒的離脱を果たすと考えた。このように、青年の自立の理論においては、親と距離をとる自立のプロセスが想定されてきたが、もう少し複雑なプロセスを考える研究者もいる。

例えば、西平(1990) は、子どもが親からどのように自立していくかという視点から、心理的離乳を3段階に分類しており、それを大野木(2009) は以下のようにまとめている。第一次心理的離乳は、思春期から青年期中期にあたり、子どもが親との依存関係を脱却し、親子の絆を壊そうとすることが中心課題となる時期である。第二次心理的離乳は、青年期中期から後期にあたり、第一次心理的離乳で得られた自律性によって、子どもが親を客観的にながめ、お互いの関係を自覚的に修復し、親子の絆の再生と強化を行うことが課題となる時期である。第三次心理的離乳は、青年期後期以降にあたり、両親から学んだ価値観を超越し、自らの生き方を確立しようとする真の自己実現を目指す段階である。このような心理的離乳の考え方を踏まえると、親への絆は一度壊された後で再度修復されるという流れの中で、青年は親からの自立を果たしていくという可能性がある。

本研究のテーマである、仲の良い親子関係と自立の関連についての研究はいくつか行なわれているが、「仲の良い親子関係」や「自立」をどう捉えるか、どう定義するかによって、多様な結果がみられる。

渡邊(1994) は中学生から大学生を対象に質問紙調査を行い、親への「依存・絆」(親といると安心、親は心の支え等9項目)が発達的にどう変化していくか、またそれが身辺自立や自立意識とどう関連しているかをみようとした。その結果、大学段階において親との依存・絆は、中学段階や高校段階よりも強くなること、そのような傾向は母-娘関係で顕著であり、それがま

た身辺自立の行動とプラスに関連し合っていることを明らかにしている。しかし、渡邊(1994) で測定した自立はあくまで身辺自立の行動であるため、親への依存や絆が親からの心理的離乳とどのように関連するのかは、まだ明らかではない。

他方同じような関心から、親子間の「密着」と自立・適応との関連を検討した研究としては、水本・山根(2010) がある。母娘間の行動的・心理的密着度は高いが自立も中程度である「密着型」は、「親からの心理的分離」得点は低いという特徴が見られている。しかし、水本・山根(2010) で測定した親子関係は親子間の「密着」であるため、滝井(2006) がみたような「強い信頼感をもった親子関係」とは異なるかもしれない。以上の議論と研究を踏まえると、大学生、中でも女子大学生において、渡邊(1997) や滝井(2006) でみられた信頼感や情緒的つながりのある親子関係は、西平(1990) のいう第二次心理的離乳期の「絆の再生と強化」の役割を果たすのではないかと考えられる。そして、このような親子関係であれば、心理的離乳、つまり親からの自立とプラスに関連し合う場合もあるのではないだろうか。そこで本研究では、親子関係の親密さに注目し、親密感を「信頼感のある情緒的なつながり」と定義し、親への親密感と親からの自立との関連を検討する。さらに、親密感の高低と自立の高低により、4類型に分類し、各類型での適応問題や発達課題との関連を検討する。また、どのような親子関係のあり方が親への親密感や親からの自立に影響するのかについても検討するため、子どもの愛着形成や自立を促すような親の養育態度を測定する質問紙を作り、親密感や自立との関連を見る。これらの分析の結果、親密感と自立との関連が高い群が抽出されれば、現代における新たな親子関係として提案できるのではないかと考える。

方 法

1、調査協力者

関東地方の大学生1~4年生の男女470名に対して質問紙調査を行った。その内女性340名のデータから、不備のあった回答50名を除外した290名を有効回答とし、分析を行った。

2、調査の時期ならびに手続き

2017年7月~9月に行った。調査は、無記名式質問紙を講義時間内に配布、実施、即時回収することにより行われた。質問紙には、①回答により個人が特定されることはないこと、②回答した内容が外部に漏れることはないこと、④回答は強制ではないこと、③調査に同意していただけても不利益は一切生じないことを明記した。なお、この調査は東京成徳大学大学院心理学科の研究倫理審査において承認されている(承

認番号17-1-14)。

3、質問紙の構成と調査内容

質問紙はA3版用紙1枚で構成された(A3用紙2つ折り、4ページ)。フェイスシートには親子関係について尋ねる旨を示し、倫理的配慮を記載し、学科・学年・性別・年齢・親との同居/別居についての回答欄を設けた。2ページ以降は、以下の質問紙・尺度をその順番に掲載した。また、表記に関して、質問1から質問3の親子関係に関する質問については、母親や父親以外の養育者の存在も考慮し、「親(保護者)」という表記とした。さらに、母親・父親等、誰を想定したかによって回答に違いがある可能性があるため、上記の3種類の質問に関しては、誰を想定して回答したかを最後に選択してもらった(複数回答可)。

親(保護者)への親密感の測定

①親(保護者)への親密感質問紙

親への親密感を「信頼感のある情緒的なつながり」と定義し、「母子関係における精神的自立尺度」(水本・山根, 2011)の下位尺度「母親との信頼関係」、「親子間の信頼感に関する尺度」(酒井, 2005)等を参考に質問紙を作成した。具体的には、「私と親(保護者)は仲が良い」「私は親(保護者)と一緒にいると何となく幸せを感じる」等の12項目から成る。それぞれの項目について、「あてはまらない～あてはまる」の5件法で回答を求めた。得点が高い程、親(保護者)との親密感が高いことを示す。

親(保護者)からの自立度の測定

②親(保護者)からの自立質問紙

親(保護者)からの自立の中でも「心理的分離」に焦点を当て、「情緒、認知、行動の観点から親(保護者)に依存する程度の少なさ」と定義し、質問紙を作成した。その際、「日本版Hoffman(1984)の心理的分離質問紙」(上地・上地, 2004)、「母子関係における精神的自立尺度」(水本・山根, 2011)の下位尺度「母親からの心理的分離」等を参考とした。具体的には、「私は親(保護者)がいなくてもやっていける」等の行動的側面5項目、「親(保護者)から離れていても、孤独は感じない」等の情緒的側面5項目、「私は親(保護者)の考えや期待にあまりとらわれない」等の認知的側面5項目の計15項目から成る。それぞれの項目について、「あてはまらない～あてはまる」の5件法で回答を求めた。得点が高い程、親(保護者)からの自立度が高いことを示す。

親(保護者)の養育態度の測定

③愛着形成や自発尊重的な養育態度を測定する質問紙
親(保護者)の養育態度の中でも親への親密感や親

からの自立に関係すると考えられる「自発尊重」や「愛着形成」の側面に注目し、質問紙を作成した。辻岡・山本(1976)の「親子関係診断尺度EICA」や東・柏木・繁多・唐澤(2002)の「FDT親子関係診断検査」等を参考とした。大学生になる前までの親(保護者)の養育態度を尋ねることとし、具体的には、「親(保護者)は私にあたたかく接してくれた」等の愛着形成的養育態度9項目、「親(保護者)は何事につけて、私に任せてくれた」等の自発尊重的養育態度9項目の計18項目から成る。それぞれの項目について、「あてはまらない～あてはまる」の5件法で回答を求めた。得点が高い程、子どもが親(保護者)の養育態度を愛着形成的、及び自発尊重的だったと認知していることを示す。

適応の否定的状態と肯定的状態の測定

④抑うつ尺度

適応の否定的状態である「抑うつ」を測定するため、福田・小林(2003)の「日本語版SDS」から「何をしても楽しくない」の1項目を使用し、島・鹿野・北村・浅井(1985)の「日本語版キャロル抑うつ自己評価尺度」から「ひどくいらいらする」等の6項目を採択した。それぞれの項目について、「はい、どちらでもない、いいえ」の3択で回答を求めた。得点が高い程、抑うつ程度の高いことを示す。

⑤主観的幸福感尺度

適応の肯定的側面である「主観的幸福感」を測定するため、伊藤・相良・池田・川浦(2003)の「主観的幸福感尺度」を使用し、「あなたは人生がおもしろいと思いますか」等6項目を採択した。それぞれの項目について、「とても～全くない」の4択で回答を求めた。得点が高い程、幸福感が高いことを示す。

発達課題の測定

⑥アイデンティティの確立尺度

下山の「アイデンティティ尺度」(1992)の下位尺度「アイデンティティの確立」から項目を使用し、「私は自分なりの生き方を主体的に選んでいる」等6項目を採択した。それぞれの項目について、「あてはまる～あてはまらない」の4件法で回答を求めた。得点が高い程、アイデンティティの確立度が高いことを示す。

⑦職業的モラトリアム尺度

松田・永作・新井の「職業選択不安尺度」(2008)から項目を使用し、「社会に出ていくことが不安である」等の6項目を採択した。それぞれの項目について「あてはまらない～あてはまる」の5件法で回答を求めた。得点が高い程、職業的モラトリアム度が高いことを示す。

結 果

1. 親(保護者)への親密感質問紙の因子構造

まず、親（保護者）への親密感質問紙の各12項目の平均点と標準偏差を確認した所、項目1、項目2、項目3、項目6、項目8、項目11に天井効果がみられた。そのうち特に高い天井効果がみられた項目1、項目2、項目3、項目8を削除し、残りの質問項目について、主因子法による因子分析を行った。結果、この質問紙の因子構造は1因子となり、「自分の親（保護者）を見て、この親（保護者）の子で良かったと思う」、「私と親（保護者）は互いに信頼し合っていると思う」等の計8項目となった。今後、親（保護者）への親密感質問紙の結果は、ここで得た8項目を使用したものである。

2. 親（保護者）からの自立質問紙の因子構造

次に、親（保護者）からの自立質問紙の各15項目の平均点と標準偏差を確認した所、天井効果、フロアー効果はみられなかった。そのため全ての質問項目について主因子法による因子分析を行った所、この質問紙の因子構造は3因子となった。どの因子にも因子負荷量の低い項目1を削除し、計14項目となった。

第1因子は、「困難なことがあっても親（保護者）に助けてもらわない」、「苦しい状況に陥った時も、親（保護者）にSOSは出さない」等の4項目から成り、この因子を「行動的自立」因子と命名した。第2因子は、「私は親（保護者）のことを一人の人間として客観的に見ている」、「私と親（保護者）は互いに独立した関係だと思ふ」等5項目から成り、この因子を「認知的自立」因子と命名した。第3因子は、「親（保護者）と離れて一人でいると、心が落ち着かなくなる」、「いつも親（保護者）のことが気になって仕方がない」（ともに逆転項目）等5項目から成り、この因子を「情緒的自立」因子と命名した。今後、親（保護者）からの自立質問紙の結果は、ここで得た14項目を使用したものである。

3. 親（保護者）の養育態度質問紙の因子構造

次に、親（保護者）の養育態度質問紙の各18項目の平均点と標準偏差を確認した所、項目10、項目11、項目16、項目17に天井効果がみられた。その内、特に高い天井効果を示した項目16、項目17を削除した。残りの質問項目について主因子法による因子分析を行った所、この質問紙の因子構造は2因子となった。どちらの因子にも因子負荷量の低い項目2を削除し、計15項目となった。

第一因子は「親（保護者）は何事につけても私のことを思いやってくれた」、「親（保護者）は私が困っている時、元気づけてくれた」等の10項目からなり、この因子を「愛着形成的養育態度」因子と命名した。第2因子は、「親（保護者）は私に『こうするように』と指示することが多かった」（逆転項目）、「親（保護者）

は私の行動を先回りして言うことが多かった」等の5項目から成り、この因子を「非指示的養育態度」と命名した。今後、親（保護者）の養育態度質問紙の結果は、ここで得た15項目を使用したものである。

なお、「親（保護者）」という表記は、質問紙の名称や項目で使用してきたが、これ以降では「親」と表記することとする。

4. 各質問紙・尺度の記述統計量と同居別居・想定した保護者での差

1～3の因子分析の結果を踏まえ、新たに構成した各質問紙・尺度の記述統計量と α 係数はTable1の通りである。各質問紙・尺度項目の α 係数は.81～.91であったことから、全ての質問紙・尺度に内的整合性がみられ、信頼性が得られたと考える。

Table1 各質問紙（尺度）の記述統計量と α 係数

| 質問紙（尺度） | 満点 | M | SD | α 係数 |
|--------------|----|-------|-------|-------------|
| ①親への親密感質問紙 | 40 | 30.81 | 6.76 | .90 |
| ②親からの自立質問紙 | 70 | 44.37 | 8.69 | .85 |
| ③親の養育態度質問紙 | 75 | 55.55 | 10.29 | .91 |
| ④抑うつ尺度 | 14 | 4.02 | 3.52 | .84 |
| ⑤主観的幸福感尺度 | 30 | 17.57 | 3.13 | .81 |
| ⑥アイデンティティ尺度 | 30 | 17.02 | 3.79 | .87 |
| ⑦職業的モラトリアム尺度 | 30 | 19.89 | 5.52 | .82 |

また、同居・別居での差を t 検定にて確認した所、行動的自立のみに差がみられた（同居>別居; $p<.05$ ）が、その他の質問紙（尺度）に差はみられなかった。さらに、親子関係に関する質問を回答する際に想定した保護者による差を一元配置の分散分析にて確認した所、やはり行動的自立のみに差がみられた（母父その他想定群>母想定群・父想定群・想定なし群; $p<.05$ ）が、その他の質問紙（尺度）に差はみられなかった。このように、同居・別居や想定した保護者による回答の差は大きくはみられなかったため、その後の分析はこれらの区別をせずに行うこととした。

5. 親への親密感と親からの自立の関連

親への親密感と親からの自立について、ピアソンの積率相関係数を算出した。Table2に示すように、「親への親密感」と「親からの自立」は、有意な負の相関を示した。さらに、親からの自立質問紙の下位尺度である「行動的自立」「認知的自立」「情緒的自立」との相関も検討した。その結果、全てにおいて有意な負の相関を示した。下位尺度の中では行動的自立が最も負の相関が強いという結果となった。

Table2 親への親密感と親からの自立との相関

| | 自立 | 行動的自立 | 認知的自立 | 情緒的自立 |
|-----|---------|---------|---------|---------|
| 親密感 | -.55*** | -.57*** | -.32*** | -.38*** |

*** $p < .001$

6. 親密感得点と自立得点の高低による4類型群の作成と適応や発達課題との関連

1) 親子関係の4類型群の作成

「親への親密感」質問紙の各項目の素点を合計し項目数で除したものを「親への親密感得点」とし、「親からの自立」質問紙の各項目の素点を合計し項目数で除したものを「親からの自立得点」とし、これらの平均値（「親への親密感」： $M=3.85$ 、「親からの自立」： $M=3.17$ ）を基準値として、高群低群を作り4つに類型化した。各類型の構成はTable3の通りである。5の相関の結果からも予想されるように、親への親密感H・親からの自立L群と、親への親密感L・親からの自立H群が他の2群に比べ、多い比率となっている。

Table3 親密感得点と自立得点の平均値による4類型

| | | 自立得点 | | 合計 |
|-------|----|----------|-----------|-----|
| | | 高群 | 低群 | |
| 親密感得点 | 高群 | 55 (19%) | 104 (36%) | 159 |
| | 低群 | 93 (32%) | 38 (13%) | 131 |
| | | 148 | 142 | 290 |

2) 親子関係の4類型群と適応・発達課題との関連

親子関係の4類型群と適応問題との関連を調べるため、親への親密感の高群・低群と親からの自立得点の高群・低群を組み合わせ、4群における適応の尺度と発達課題の尺度の各得点について、一元配置の分散分析を行った。その結果をTable4に示す。4つの尺度の得点の全てにおいて、有意な群間差がみられた（抑うつ尺度： $F(3, 286)=8.97$ 、主観的幸福感尺度： $F(3, 286)=9.13$ 、以上 $p < .001$ ）、アイデンティティ尺度： $F(3, 286)=5.48$ 、職業的モラトリアム尺度： $F(3, 286)=4.09$ 、以上 $p < .01$ ）。

次にTukey法による多重比較を行った所、抑うつ尺度では、HH、HL<LH、LLという結果が得られた。自立度の高低にかかわらず親密感が高いの方が抑うつ度が低いということがわかる。また主観的幸福感尺度では、HH、HL>LH、HL>LLという結果が得られた。自立度の高低にかかわらず親密感が高いの方が主観的幸福感が高いということがわかる。さらにア

イデンティティの確立尺度では、HH、HL>LHという結果が得られた。自立度の高低にかかわらず親密感が高いの方が、親密感が低く自立度が高い者よりもアイデンティティが確立しているということがわかる。最後に職業的モラトリアム尺度では、HH、HL>LHという結果が得られた。自立度の高低にかかわらず親密感が高いの方が、親密感が低く自立度が高い者よりも職業的モラトリアム度が低いということがわかる。

Table4 親密感HL群・自立HL群による1元配置分散分析と多重比較の結果

| 群 | 1 2 3 4 | | | | F値 | 多重比較 (Tukey) | |
|-------------|---------|---------|---------|---------|------|--------------|----------------------|
| | 親密H 自立H | 親密H 自立L | 親密L 自立H | 親密L 自立L | | | |
| 抑うつ尺度 | M | .41 | .46 | .74 | .73 | 8.97*** | 1, 2<4* 1, 2<3*** |
| | SD | .44 | .48 | .48 | .55 | | |
| 主観的幸福感尺度 | M | 3.08 | 3.06 | 2.74 | 2.81 | 9.13*** | 2>4* 1, 2>3*** |
| | SD | .46 | .51 | .53 | .46 | | |
| アイデンティティ尺度 | M | 3.01 | 2.94 | 2.65 | 2.77 | 5.48** | 1, 2>3** |
| | SD | .64 | .57 | .67 | .56 | | |
| 職業的モラトリアム尺度 | M | 3.11 | 3.17 | 3.52 | 3.52 | 4.09** | 1, 2<3* |
| | SD | .99 | .87 | .88 | .93 | | |

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

7. 親密感・自立が適応や発達課題に及ぼす影響

親への親密感と親からの自立が適応や発達課題に及ぼす影響を検討するため、「親への親密感」と「親からの自立」を独立変数とし、「抑うつ」「主観的幸福感」（以上、適応の指標）、「アイデンティティの確立」「職業的モラトリアム」（以上、発達課題の指標）を従属変数とする重回帰分析を行った。その結果をFig.1に示す。

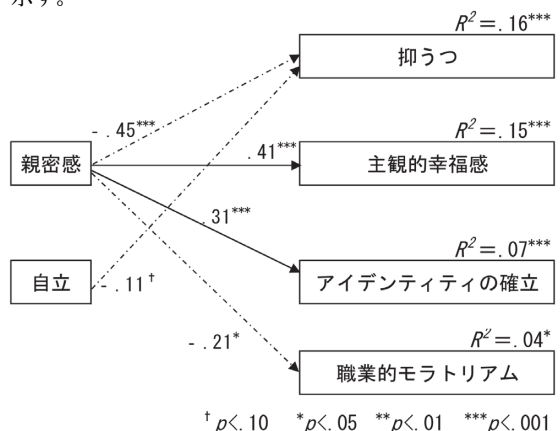


Fig.1 親密感・自立が適応・発達課題に及ぼす影響

Fig.1が示すように、4つの従属変数の R^2 値は.04～.16であり、この分析における説明力は低いという結果となった。その中で、「親への親密感」は、適応の指標である「抑うつ」には有意な負の影響を示し、「主

親の幸福」には有意な正の影響を示していた。また、発達課題の指標である「アイデンティティの確立」には有意な正の影響を示し、「職業的モラトリアム」には有意な負の影響を示していた。「親からの自立」は、10%水準ではあるが適応の指標である「抑うつ」に有意な負の影響を示し、それ以外の尺度へは影響はみられなかった。

さらに、「親からの自立」の下位尺度「行動的自立」、「認知的自立」、「情緒的自立」の適応や発達課題への影響を調べるため、「行動的自立」、「認知的自立」、「情緒的自立」を独立変数とし、先程と同様の4つの尺度を従属変数とする重回帰分析を行った。その結果を

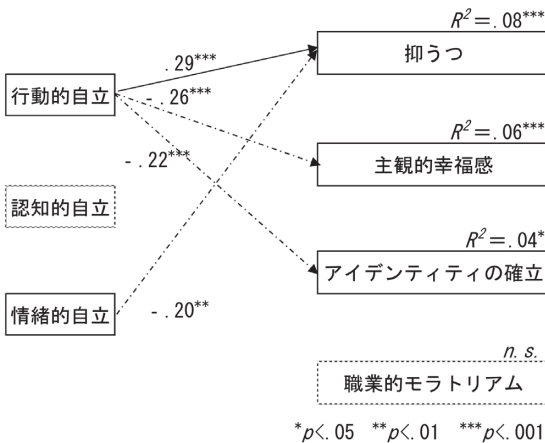


Fig.2 自立の下位尺度が適応・発達課題に及ぼす影響

Fig.2に示す。

Fig.2が示すように、 R^2 値は.04~.08であり、この分析における説明力は低いという結果になった。その中で、「行動的自立」は適応の指標である「抑うつ」に有意な正の影響を示し、「主観的幸福感」に有意な負の影響を示しており、発達課題の指標である「アイデンティティの確立」に有意な負の影響を示していた。「情緒的自立」は適応の指標である「抑うつ」に有意な負の影響を示しているのみで、「認知的自立」はどの尺度へも影響を示していなかった。また、「職業的モラトリアム」に対しては、どの下位尺度も影響を示していなかった。

8. 親の養育態度が親密感・自立に及ぼす影響

親の養育態度が親への親密感や親からの自立に及ぼす影響を検討するため、親の養育態度質問紙の下位尺度「愛着形式的養育態度」および「非指示的養育態度」を独立変数とし、「親への親密感」および「親からの自立」を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果をFig.3に示す。

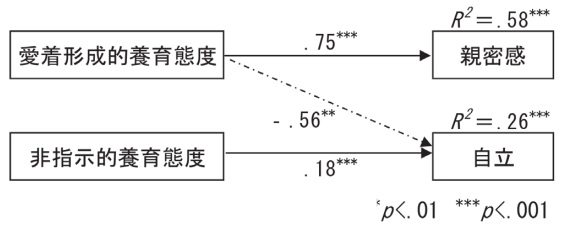


Fig.3 親の養育態度が親密感・自立に及ぼす影響

Fig.3が示すように、「親への親密感」の R^2 値は.58、親からの自立の R^2 値は.26であった。「親への親密感」には「愛着形式的養育態度」が、「親からの自立」には「非指示的養育態度」が、それぞれ有意な正の影響を与えている。また「親からの自立」には「愛着形式的養育態度」が有意な負の影響を与えていることがわかる。

さらに、「親からの自立」質問紙の下位尺度「行動的自立」「認知的自立」「情緒的自立」に親の養育態度

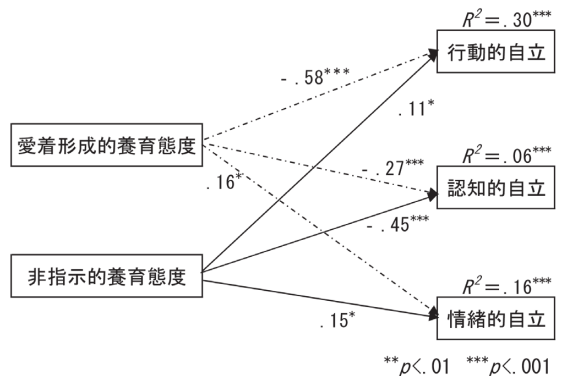


Fig.4 親の養育態度が自立の下位尺度に及ぼす影響

が与える影響を検討した。その結果をFig.4に示す。

Fig.4に示すように、「行動的自立」、「認知的自立」、「情緒的自立」の R^2 値はそれぞれ.30、.06、.16であった。その中で、愛着形式的養育態度は、「行動的自立」、「認知的自立」、「情緒的自立」のそれぞれに有意な負の影響を与えているが、特に「行動的自立」に強い負の影響を与えていることがわかる。非指示的養育態度は、「行動的自立」、「認知的自立」、「情緒的自立」のそれぞれに有意な正の影響を与えているが、愛着形式的養育態度程強い影響は与えていないことがわかる。

考 察

1. 親への親密感と親からの自立の関連

「親への親密感」と「親からの自立」の関連は負の相関であり、また実際にも、人数傾向として親密感が高く自立度が低い群と親密感が低く自立度が高い群の人たちが多いという結果になった。現代の女子大学生は、親と仲が良いが自立が進んでいないグループと親

との仲があまり良くなく自立が進んでいる2つのグループが主要であると考えられる。また、親からの自立の中でも、行動的自立が最も親への親密感と負の相関が強かったことから、親との親密感が低くて、行動面で親にできるだけ頼らないよう行動する女子大学生の姿がひとつの大きなグループとして浮かび上がった。

2、適応や発達課題での親密高・自立高群と他群との差

「親への親密感」も高く「親からの自立」も高い群は、他の群に比べて適応がよく発達課題を達成しているのではないかと予想していたが、現代の女子大学生においては自立度の高低はあまり関係がなく、親密感の高低が適応度や発達課題の達成度に差をもたらしているということがわかった。

3、親密感・自立が適応や発達課題に及ぼす影響

重回帰分析の結果でも、「親からの自立」よりも「親への親密感」の方が適応や発達課題に影響を及ぼしていることが示された。現代の女子大学生においては、親と信頼感のある情緒的つながり（親への親密感）をもっていることが適応を良好にしたり、青年期の発達課題を促している、他方、親からの自立はそれらに影響を及ぼしていないばかりか、親に頼らないよう行動すること（行動的自立）は、適応や発達にわずかにマイナスに影響していることがわかった。なお、全体において説明力（ R^2 値）が低かったため、「親への親密感」や「親からの自立」以外の要因が、適応や発達課題に影響を及ぼしていることを十分に考慮する必要がある。

4、親の養育態度が親密感・自立に及ぼす影響

「愛着形成的養育態度」は親への親密感へは大きな正の影響を及ぼしているが、親からの自立には負の影響を及ぼしていることがわかった。親からの自立を3つの下位尺度で分けて影響をみた場合、「愛着形成的養育態度」は「行動的自立」に最も強い負の影響を及ぼしていた。総じて、子どもを思いやる、元気づける、見守る等の養育態度は親との信頼感や情緒的つながりを形成することには促進的に働くが、親から自立すること、中でも親に頼らずに行動することに対しては抑制的に働くと言うことができる。また、「非指示的養育態度」は「親からの自立」に促進的に働いているが、「親密感」には特別の影響をしていなかった。

全体的考察と今後の課題

本研究では、現代の女子大学生の親子関係において、親との信頼感のある情緒的つながり、すなわち親への親密感と親からの自立との関連について検討した。

その結果、「親への親密感」と「親からの自立」の関連は負の相関を示したことで、また親との「親密感」が高く親からの「自立度」も高いグループの女子大学生が一定数見られたものの、「親密感」が高いが「自立度」の低いグループや「親密感」が低い「自立度」の高いグループのほうが主要なグループであった。さらに「親密感」も低く「自立度」も低いグループも存在していた。従来の親と距離をとる自立のプロセスではなく、西平（1990）の心理的離乳の過程を踏まえ、「親への親密感」と「親からの自立」に正の相関関係がみられるのではないかと予想したが、そうはならずむしろ、負の強い相関がみられた。

この結果について、西平（1990）の心理的離乳の過程を踏まえ、再度以下のように考察した。つまり、「青年は『親との絆の再生と強化』を経て（第2次心理的離乳）、『自らの生き方を確立』する（第3次心理的離乳）段階に至る」と考えると、本研究において測定した「親からの自立」は、むしろ第3次心理的離乳の段階の内容であったため、現代の女子大学生の「親への親密感」が高い者はまだその段階に至っていなかったのではないだろうか。他の先行研究においても自立の時期が遅延していることが指摘されていることを踏まえると、大学卒業後の20代後半から30代前半の青年期後期から成人期にあたる時期が本研究で測定した自立の時期にあたるのかもしれない。また、西平（1990）では、第1次心理的離乳において、一度絆を壊すことを想定しているが、本研究においては、「絆の強化」の部分しか測定しておらず、親密感の高い青年が必ずしも第1次心理的離乳を経たかどうかは定かではない。今後このような発達縦断的研究が必要と思われる。

さらに、現代の女子大学生の適応や発達課題に対して「自立度」はほとんど影響を与えることがなく「親密度」のみが肯定的な適応や発達課題に対して促進的に、否定的な適応や発達課題に対しては抑制的に働いていた。これまでの発達心理学では、子どもがおとなに向って健全に成長するためには親からの自立が必須なものと考えられている。しかし本研究の結果は、現代の女子大学生においては親からの自立よりも親との「信頼感のある情緒的つながり」のほうが健全な成長に貢献していることを示した。この先の将来における「親から自立」の必要性についてはともあれ、女子大学生という身分においては、「親からの自立」は大きな発達課題ではないことが明らかになったと考える。

このことから、「親からの自立」は、権威的な親子関係の下では必要であったが、現代の青年においては、必ずしも重要な要素ではないという可能性が考えられる。つまり、権威的な親子関係の下では、親の影響力が強いので、親の管理下を離れ自活をし、親とは別個の独自の考えをもつことが必要であったが、本研究でみられたような信頼感のある情緒的つながりがある

親子関係においては、親から物理的にも心理的にも離れる必要がないのではないか。とはいえ、彼女らが5年後、10年後にどうなっているかについては、本研究においては明らかではない。従来重要とされてきた「親からの自立」を達成しないまま年齢を重ねていくのか、もしくはいずれは「親からの自立」を達成していくのか、また、そのような経過が適応にはどのように影響するのか、今後の研究課題になるであろう。

引用文献

- 東洋・柏木恵子・繁多進・唐澤眞弓 (2006). FDT親子関係診断検査. 日本文化科学社
- Blos, P.(1967). The second individuation process of adolescence. The Psychoanalytic Study of the Child, 22, 162-186.
- 土井隆義 (2014). 若者たちの“生きづらさ”の正体 第10回 友だち親子の落とし穴 月刊学校教育相談 28 (1), 48-51
- 福田一彦・小林重雄 (1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌 75 (10), 673-679.
- Hollingsworth, L.S.(1928). The Psychology of the Adolescent. Appleton.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, 74 (3), 276-281.
- 上地雄一郎・上地玲子 (2004). ホフマンの心理的分離質問票の妥当性の検討. 甲南女子大学研究紀要 人間科学編, 40, 19-25.
- 季刊子ども学 (1997). Vol.14 冬号, 特集「友達親子」 <http://www.crn.or.jp/LIBRARY/KODOMO/VOL14/SUMUP.HTM>(最終閲覧日:2017年1月8日).
- Mahler, M.Bergman, A.Pine, F.(1975).The psychological birth of the infant: Symbiosis and individuation Basic Books.
- 松田侑子・永作稔・新井邦二郎 (2008). 職業選択不安尺度の作成. 筑波大学心理学研究, 36, 67-74.
- 宮本みち子 (2004). ポスト青年期と親子戦略—大人になる意味と形の変容 勁草書房
- 水本深喜・山根律子 (2011). 青年期から成人期への移行期における母娘関係. 教育心理学研究, 59 (4), 462-473.
- 水本深喜・山根律子 (2010). 青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味: 精神的自立・精神的適応との関連性から. 発達心理学研究, 21 (3), 254-265.
- 西平直喜 (1990). 大人になること: 生育史心理学から. 東京大学出版会
- 大野木裕明 (2009). 女子青年からみた親子間の呼称と心理的離乳. 仁愛大学研究紀要. 人間生活学部篇 人間生活学部篇, 1, 53-61.
- 酒井厚 (2005). 対人信頼感の発達—児童期から青年期へ—川島書店
- さらだたまこ (1998). パラサイトシングル WAVE 出版
- 島至・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, 27 (6), 717-723.
- 下山晴彦 (1992). 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で—. 教育心理学研究, 40, 121-129.
- 高阪由紀江 (2005). 思春期なのに親と仲よし「友達親子」はだめですか? 女性のひろば, 313, 102-107.
- 滝井麻友美 (2006). 現代の親子のカタチ—友達親子の実態を探る http://tatsuki-lab.doshisha.ac.jp/~statsuki/Thesis2005/05_takii.pdf(最終閲覧日:2018年1月8日).
- 辻岡美延・山本吉広 (1976). 親子関係診断尺度EICAの作成—因子的真实性の原理による項目分析 関西大学社会学部紀要 7 (2), 1-14
- 渡邊恵子 (1994). 青年期の自立と親子関係 日本女子大学紀要 人間社会学部, 5, 305-319.
- 山登敬之 (2013). 「友だち親子」をどうみるか 特集 反抗期を乗り切る. 児童心理, 67 (11), 956-960. —2018.1.30受稿, 2018.3.2受理—

Relationship between Intimate Feelings of Female College Students toward Parents and the Independence from them —How Adaptation, Developmental Tasks and Parenting Attitudes are related to such matters—

Shoko HONDO (*Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University*)

Kunijiro ARAI (*Tokyo Seitoku University*)

The aims of this research are to examine: 1) the relationship between "intimate feelings towards parents," which is defined as "trust-based emotional connections," and "independence from parents"; 2) how "intimate feelings towards parents" and "independence from parents" are related to adaptation and development tasks; and 3) how parenting attitudes are related to "intimate feelings towards parents" and "independence from parents." We conducted a questionnaire survey for university students, and used the data of 290 female university students among the questionees for the analysis.

The main results of the analysis were as follows;

1. The correlation analysis of intimacy and independence showed a significant negative correlation.
2. The one-way analysis of variance showed that the degree of intimacy, rather than the degree of independence, influences the adaptation and the achievement of the development tasks.
3. The multiple regression analysis showed that intimacy positively influences the adaptation and the achievement of development, while independence does not, and rather, influences the active independence negatively, though slightly.
4. The multiple regression analysis also showed that parenting attitudes which tend to nurture attachment have significant positive influence on intimacy and have significant negative influence on independence.

As the result of analyses, it was made clear that, as for the female students, intimacy, rather than independence from parents, which has been considered to be a significant development task, contributes to healthy growth more.

Key words: intimate feelings towards parents, independence from parents, adaptation, developmental tasks, parenting attitudes.

Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University
2018, Vol. 18, pp. 52-61